

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

②分野横断的な科目群、副専攻科目群等の充実

●総合研究大学院大学先導科学研究科

「全教員参加型博士課程教育の構築」の事例

(具体的に何を実施したのか)

主論文に加え、副論文の提出を義務づけた。

本専攻では生物系4部門と社会系1部門を置いている。生物系で主論文を書く学生は社会系の、社会系で主論文を書く学生は生物系の副論文を提出し受理されていることを、学位申請の条件とした。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

副論文が形骸化しないようにする一方、過重な負担にならないように細心の注意を払った。副論文には副論文の主旨導教員がつき、本論文の主任指導教員が副論文の副指導教員として指導にあたった。この体制によって、本論文の研究に支障がでない範囲で副論文に取り組ませることが可能になった。副論文には研究時間の10%を充てることを目安にした。また、副論文に取り組むに当たって基礎的なことがらを学ぶ授業を開講した。社会系では「科学・技術と倫理」、生命系では「ミクロ生物学・マクロ生物学」がそれにあたる。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

学生が自らの研究のみに没入することなく、科学と社会のつながりについて広く考える機会を提供することで、視野を拡げることにも効果があった。すでに副論文が受理された学生の数名から、そのような感想が寄せられた。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

B. 円滑な学位授与の促進

①複数教員による多面的な指導体制の整備

●総合研究大学院大学先導科学研究科

「全教員参加型博士課程教育の構築」の事例

(具体的に何を実施したのか)

一人の学生に対して3人の教員で指導教員団を構成する一方、専攻の全教員で全学生の研究進捗状況を逐次把握し、指導するしくみを構築した。

学生居室を研究室単位でなくオープンな構造にし、複数の教員あるいは他研究室のメンバーたちと日常的に会話を交わせる環境を整えた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

指導教員団には、専門分野の主任指導教員と副指導教員に加え、副論文の主任指導教員が副指導教員として加わった。

年2回のプロGRESSで、全教員と全在生学生の前で研究の進捗状況を報告、質疑応答を行なわせた。プロGRESS後には全教員で各学生の研究進捗状況を議論、必要な指導方針を合議で決定した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

研究指導が研究室内に閉じることによる、いわゆる“タコツボ化”は起きていない。興味の変化に応じて、入学当初に所属を決めた研究室から、別の研究室に移る事例も複数あり、学生の希望や進捗状況に沿った研究指導ができています。